

近未来原発物語 ( SF )  
～人間らしいロボットの食べ物～  
6 Days of twonovel



ラナ

## はじめに

真夜中にテレビをつけたら、天気予報がやっていた。「世の中は異常気性です。みなさん、気を付けましょう。。。」

11月30日 ラナ

このお話は、サイエンス・フィクションです。

人間らしいロボットがカーキに説明している。「原発から出る放射能を一番おいしく調理（処理）してもらうために、良いところ悪いところどっちも知る原子力工学 専門のロボットらしい人間をたくさん雇ったのだ。ドイツにはとくに一流のシェフがいるので技を覚えてもらうためドイツ語堪能な者もやとった。」

中間保管施設の謎～人間らしいロボットが住民に説明している。「ロボットらしい人間の皆さん～。原発の放射能の土は中間保管施設に入っている所以町に汚染状況はありませんのでハリキッて復興しましょう～。他の町には3年の放置によって放射能の土が解毒した、と伝えて焼却してもらう予定です」

唯一の人間らしい人間の少女カーキは一人考え事をしていた。(あんまり、にんげんが自分勝手な理由で地球をいじめてばかりいたら、地球があたたまって、そしてふんわりとなって 地軸が傾いて 異常な自然災害が起こる というのは そうけんとうちがいではないように思えるな。)

こくどこ一つうしょうの闇～鈍感なロボットらしい人間も放射能に嫌気がさしてきた。そこで人間らしいロボットは作戦を練ったのさ。リニアや新幹線をすごい速さで作る事。作ってしまえば必然的に原発が必要になる。実際それに乗る者はいないが人間らしいロボットは放射能が欲しいだけだから関係ないのさ。

カーキは学校できりすときょうを学んだとときのことをふと思い出した。「今から、最大の教えをつたえます。人間は全てのものをつくりました。全ての植物、動物は人間のために存在しています。人間の道具となる為存在しています。」

ロボットらしい人間が原発の放射能が嫌になってきた頃に、人間らしいロボットはいい事を思いついた。「あなたのお家をキレイにしますよ～！」放射能が水で洗い流され、その水は大きな大きなポリタンクに溜めていかれた。人間らしいロボットはそれを飲料水にした。何しろ彼らの一番の栄養素は放射能だから。

～the end～